

## 1. 国土建設の長期構想と技術

### 2. 実りの秋

### 3. 就職と学生

### 4. 文字がかけない？



1. 建設省は豊かな社会を築くための国造りということで、今後 20 年間の産業構造高度化にともなう都市化の進展と、地域間交流の増大および社会構造の変化に対応して、うつべき主要な手段を発表した。自然環境の保護（緑と生活を守る）、大都市の整備（過密の解消と機能の純化）、地方都市の整備（開発の促進と都市的生活機能の整備）、農村地域の整備（農村の構造変化への対処）、地域間交流の促進（生産および生活条件の改善）等である。きわめて常識的なことであるが、頭の中を大づかみに整理するには役立つ資料である。土木技術者はこのような対策を前提として、各部門で技術上のうすせいをキャッチし洞察しなければならない。過去 20 年をふりかえても、今日の建設技術は全般を見渡すことができないほど高度化、分化しているので今後 20 年の技術は予測できないが、しかし若い人達がどんどん育てるので、思いきった能力開発の方策をとって育成したいものである。土木学会も学生会員が増えてゆくとのこと、楽しみである。

[J]

2. 秋は心身の活動に最も適した条件を備えているものとみえて、食欲の秋、読書の秋、美術の秋、スポーツの秋……等と活動の成果が誇示される季節である。稲作は史上最大の豊作間違いなしと報じられ、栽培技術の発達もさることながら、大きな災害が少なかったことは誠に喜ばしい。

自然の成果に対し、建設業界の成果は自然のサイクルのようにはいかないが、国土縦貫高速道路の第一歩が踏み出され、東名、中央道等の着工、山陽新幹線のルートの決定、各本線の複線および電化工事、成田国際空港の決定、1 世帯 1 住宅のスローガン等、大規模な建設工事の計画および着工が進み「社会開発」の表看板の下に続々と種子が蒔かれ育ちつつある現状で、自然にたとえると成長期の真夏に相当するのかも知れないが、何時の日にか建設業界の成果が“実りの秋”として実感される日がくることを願うものである。

[S]

3. 10 月ともなると来春大学を卒業する学生は就職先も大方が決まり、これから卒業研究に一段と力を入れる時期となってくる。大学の就職担当教官として、この夏を急がしく過した私も肩の荷が下りて、さて今年就職の成果はとかくと様々ながらについて考え、また来年の就職はどのようにするかなどと考えるゆとりが持てるようになった。

就職の世話をしついで痛切に感じられたことは、縁故就職がいまだに学生の就職で大きな地位を占めていることである。世の中はだんだんと能力本位となり、多くの会社では、社内試験によって有能な人々が責任ある地位について仕事をし、学歴等を余り重視しなくなる傾向がある。このような社会の動きに対して、卒業生の社会への出発点ともなるべき就職で、相変らず縁故就職がはばをきかしていることは、世の中の動きに逆行するように思われていたしかたがない。

有能な人材を広く世に求めてこそ進歩があり、また自分の未来に大きな希望をいだいて勉学にはげんでいる学生のはげみにもなると思われる。

一方、大学としても反省すべき点は多々ある。一たび大学に入学すればそれほど努力しなくてもなんとか卒業できてしまうような現状では、現在の社会が求めている人材を世に送り出しているとはいえない。一考をわずらわしたい問題である。

[C]

4. わが国の国語問題は、国語審議会の委員の交代にともない、また変動がみられようとしている。国の姿勢に同調したわけでもあるまいが、最近の国語の乱れようは、巷間の定説ができるほどであり、心ある者のひんしゅくをかっている。ふりかえて土木界をみるに、その技術を伝える国語——とりわけ文字に対する認識に欠けるうらみがないか、素直に反省してみるときいているようだ。特に、明日の日本の指導者ともなるべき若き技術者層の中には、自己の思索を十分に正しく表現することに国語力および表記力しか持たない者があると聞く。すべてに基本が必要なことは、だれよりも技術者であるところの各自が御存知であるはずであるが、如何か。

[E]